

ミステリ読書案内

2021. 11. 15 発行元

第295号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

「ジョイノベルス」のこと

「カッパ」「講談社」「トクマ」「角川」「NON」「フタバ」と書いてきたので、次は「ジョイノベルス」の話に行こう。実業之日本社から出ているノベルスシリーズ。併せて「廣濟堂ブルーボックス」についても少し。

.....

1970年代前半のスタート

ジョイノベルスは実業之日本社から出ている。時期によっては有楽出版社が発行元で、実業之日本社が発売元になっていることもある。Wikipediaでは1970年代前半にスタートしたと書いてあるが、私の手元でもいつ開始したかは明確ではない。1980年頃には梶山季之、宇野鴻一郎、富島健夫、勝目梓、阿部牧郎、川上宗薫、志茂田景樹の本など風俗小説傾向の本が並んでいる。実業之日本社の文芸誌『週刊小説』との連携も多かった。

1980年代の半ばからミステリに力を入れ始め、赤川次郎の『花嫁シリーズ』、西村京太郎の『十津川警部シリーズ』、木谷恭介の『宮之原警部シリーズ』、吉村達也の『温泉シリーズ』、梓林太郎の『小仏シリーズ』、今野敏の『任侠シリーズ』、『潜入捜査シリーズ』などが発刊されていった。

トラベル・ミステリ・シリーズ

平成の時代になるとトラベル・ミ

ステリが増えて、前述の西村京太郎や木谷恭介の他に、秋月達郎や石川真介、金久保茂樹、津村秀介などの作品も収められていった。いずれも大きな話題になるほどの出来ではなかったが、この時期を特色づけるミステリ作家として記憶に留めておくことも必要かと思う。

木谷恭介・自選集・宮之原シリーズ

木谷恭介の作品はトクマ・フタバ・ケイブンシャ・光風社・サンケイ・桃園・廣濟堂ブルーボックスなどとあちこちのノベルスから出ているのだが、2000年代に入って「自選集」と名づけられて、このジョイノベルスに20冊以上再刊の形で収められた。

木谷は出版社を変えて次々再刊をする特殊な作家で、文庫本になってもいろいろなところから出ている。小さな出版社から発行部数を押さえて出すという方法も何かメリットがあったのだ推察される。10年ほど前にはどこの古本屋にも多数並んでいたが、最近はあまり見かけなくなった。

「廣濟堂ブルーボックス」

私の本棚では、ジョイノベルスの隣には廣濟堂ブルーボックスが何冊か入っている。だいぶ紙に色がついて古くなってきた印象。『廣濟堂ブルーボックス』をネットで調べてみても全体像の説明を発見することはできなかった。1980年代には始まっていた記憶がある。現在、どんな作家のどんな本が収められていたかをきちんと整った形で見るのは難しいのかもしれない。

私の手元にある本は木谷恭介の宮之原警部シリーズが主である。他に出ていたものとしては馬場祥弘や桐島那智の第二次世界大戦関係の戦記ものとか、藤川桂介の「魔界戦士シリーズ」などが目に付く。ミステリ関係で言うと胡桃沢耕史の「翔んでる警視シリーズ」や斎藤栄、和久峻三、今野敏、松岡弘一などの作品も入っている。赤川次郎の本も入っている。アクション系統の内容が多いような気がする。

『廣濟堂ブルーボックス』の中には、発行部数の関係か、保存されている数が少ないのか、古書市場では高値が付いている本があるようだ。残念ながら私の手元に残してある本ではないようだが…。

連城三紀彦「夜よ鼠たちのために」

ジョイノベルスで1983年に出版された本。現在は宝島社文庫版が手に入りやすいようだ。私の手元にもあるジョイノベルス版の初版は、古書市場では比較的高値で取引されている。4000円くらいのものもあり、値段はかなり幅があるようで、目安もはっきりしない。

文芸誌『週刊小説』に掲載された短編6篇を集めた短編集。副題に「クール・サスペンス」と書いてあり、当時の連城三紀彦ミステリの一面を表現している。帯には「殺人に理屈はない—新感覚のサスペンスをどうぞ」の文字。連城は1978年に『幻影城』新人賞を受賞しているが、『幻影城』そのものが行き詰まってしまう、彼が本格的に本を出し始めたのは1980年から。『戻り川心中』（講談社）で推理作家協会賞を取り、本書を出した年は一番勢いがついた年だった。表題作の『夜よ鼠たちのために』は、孤児院で育った男の独白から始まる。誰からも愛されずに、鼠を可愛がっていた子どもの頃の回想である。そして、現在の世田谷の総合病院の院長をしている横住忠雄の元に脅迫電話が入る場面に転換し、復讐の事件が幕を開けていく展開である。連城の作品は、人物の内面を掘り下げ、どろどろとした思いの部分を描きながらも、ミステリらしいトリックや仕掛けがあるのが特徴で、この本の中でもその本領が発揮されていると言えるだろう。